

朝方に、雲粒と呼ばれる水の粒子が発生と蒸発をくり返した。ミクロン単位のそれは雨粒にはなれずに蒸発し、雲と呼ばれるおおきな群れ、グレーの浮遊体となって山肌を這っていった。ただ移動していたのではなかった。その姿はだんだんと大きく、濃密に変わっていく。浮遊体へ向かって絶えず粒子が供給されているのだ。大気中で飽和して、木々の間、溪流のどこから蒸気はますます立ち上ってくるので、雲はそれらを待っているだけでいい。

そうやって数時間が経ち日が暮れて、冷却効果がもっと強くなるころに、すでにいくつもの世代を経たその塊は、ついに雨雲になる。雲粒はもう蒸発する速度よりも、互にくつつき、より大きな塊になっていく速度の方が早くなっている。ミリ単位になった水の塊、雨粒は、大気との摩擦にあおられながら、重力の中心へ引き寄せられていく。

唐突にそれは起こった。雲粒の運命をしめくくって、さざめきをともしなう降雨が始まった。

自転車をこぐ亮治の頬に、微かな雨粒が落ちた。

「家までもつてくれよ」

と、ペダルをこぐ足に力を込める。

駅前のコンビニから山裾の家までは、自転車で二十分ほどかかる。途中、小川をまたぐ橋のふもとには地藏菩薩の祠があり、十時を過ぎた暗いなかではあるが、亮治はブレーキをかける。祠の前に立ち、目の前で手のひらを合わせ、ひとときだけ気を落ち着かせる。短い時間ではあるが思いを果たした気持ちになると、再び自転車にまたがり、脚に体重をかける。お参りする姿をだれかに見られることを心配して、また気恥ずかしさもありません、早く立ち去りたいのだった。

雨雲との競争は不利になりつつあった。吾妻川の支流にある土手を走り、かつて通った中学校のグラウンドが見えると、そのわきの道へと進む。長野街道を渡り、路地に入る。そこからは緩やかな登

り道となる。前方の湾曲したアスファルトには水たまりが広がっている。それは高校の同級生の家が建て替え工事をした際に、工事車両がつけたものだ。補修もされずにそのままになっていく様子は、亮治に、この町が人々に放棄されつつあるのだ、と連想させる。それはこの場所だけのことではない。見知った通りを注意深く見たなら、そこかしこにその兆候が現れている。青い外灯の光に照らされて、濡れた町は暗く沈んでいた。

ますます崩れていく天候のせいで亮治はいつも以上に悲観的な予感にとらわれる。帰ろうとする家は、今夜のうちにも裏山が崩れ、その土砂に呑み込まれるのではないか。自分はいま、その窮地へと自転車をこいでいるのではないか。このまま家に帰り、自分が死んだなら、出かけている真緒だけが生き延びることになるだろう。真緒は家族を失ったという、その影とともに生きていく。いまならばまだ、自分には選択権がある。このまま家に走りこむか、どこかで雨宿りをするか。雨宿りをしたならば、結果的に死の運命をまぬかれるのだ。この土地に命を飲み込まれないですむ。そのさきには、東京での、真緒との二人の生活があるだろう。お互いを支えながら、流れの速い、まぶしい文化を横目に、都市の物語に組み込まれていく……。

結局のところそれだけの勇氣はいまの亮治にはなかった。雨雲に追いつかれ、家に着くころには、ずぶぬれになっていた。納屋に滑り込んで自転車を止め、レインコートの水けを払う。板葺の屋根の下から空を見て、黒々とした雨雲が背後から津波のように流れていくのを知る。

（東京なら雨雲だって、電灯で照らされている）

亮治は、山のふもとに据えられた実家、生活だけの住処から、わだかまった黒いものが流れ出ていくのだと感じた。

（こんな土地はこうして雨に打たれた方が、かえっていい。馬鹿な親父も、もしかしたら、母親も。流すほうがいいことだって、世の中にはある）

と、腕に鳥肌が立つのを感じながら、しばらくぼんやりする。明日の朝には、体を冷やした代償に、頭痛を抱えることになる。危ぶみつつ、なぜかその場所を離れることができなかった。先ほどの予感が現実になるのではないかと、山肌に目を凝らしたりもする。

そのうちに、離れの一階に明かりがついていることに気がついた。その明かりは初めから暖かく見えた。亮治は直感的に、それがいいことであるとわかった。庭を横切り、明かりへ導かれるように足を運ぶ。正面の戸を開けようとするが、どうやら鍵がかけられている。戸のすぐ脇にある、すりガラスの窓からは白熱灯の明かりが漏れている。雨音に邪魔をされながら耳を澄ますと、キーン、キーン、と電子音に似た鋭い音がした。

確かめようとして反対側の耳をふさいだが、室内からの音は不規則なうえ、雨音は反響もしてくるので、よく聞こえない。もういちど戸を開けようとしてみたが、腕に力を入れて引いても、三和土の上に履物の染みを作るだけだった。

戸を開けようとする音が室内では大きく鳴るらしかった。「だれ？」と、中から声がした。間違いなく真緒の声だった。

「真緒？　なんでここにいるの？」

「亮治？」

真緒の、気を削がれた声もれてくる。亮治は驚きと安堵で、体が熱を帯びるのを感じる。人の声が止むと、室内から再びキーン、キーンと、聞こえてきた。

「その鳴き声は猫か。拾ったんだな。それで帰ってきた？」

「猫のせいじゃない」

「じゃ、なんでなの？」

真緒からの返事はない。

亮治は戸の前で所在なく行き来した。姉が家に帰っているという驚きで、考えがまとまらない。どんな言葉をかけたらいいか思案したが、どの言葉も真緒の機嫌を損ねるように思えた。

どのような責任があつてのことかわからないが、自分の罪深さに

崩れそうになる。それを、いつからか身につけた動揺の治まる方法、握った右のこぶしを心臓に当てて、うつむき加減に深呼吸をするというやり方でいなしていく。

気分が落ち着くと、思考が普段のように働き始めた。母屋に入りレインコートを脱ぎ、それを玄関わきのフックに吊るす。隣には母親が使っているコートがかけられている。濡れていないところを見ると、雨が降る前に帰宅したらしい。リビングからは、その母親が、父親を相手にして話すのが聞こえてくる。

「ただいま」

亮治はことさら大きな声でリビングへ入っていく。

「あら、帰ったの。まあびしょ濡れじゃない。食事の前にお風呂入んなさい」

母親はフライパンで野菜をいためながら、ちらりと目を向ける。

「家に入る前にちよつと濡れただけだよ。それより離れに真緒がいるみたいだけど」

「そうなの。会社の面接、行かなかったんだって」

「さぼったの？」

「それで、子猫を連れて帰ったのよ。しかも四匹。まったく、優しいんだか、馬鹿なんだか」

「子猫を拾ったから、会社の面接行けません、か。帰ってから、ずっとあそこにいるの？」

「そう。なにか訊かれるのを嫌がってるのかしらね。初めはさ、すぐに会社に電話させて、面接時間を遅らせてもらったとか思ったけど、なにを言っても不貞腐れて引きこもってるの。猫の餌を持って戻ったつきり。何も食べてないのよ」

亮治は母親の手前、笑ってみせた。

「笑ってる場合じゃないでしょう？ いまどき、このタイミングで就職できなかつたらどうなるか、本人だってわかっているでしょう……」

リビングからは離れの明かりが見えている。亮治にはそれが頼り

なく見える。真緒はこれで幸せになれるのか、と、誰にもいえないことを考える。数日前の出来事が思い出されていく。就職が決まったならどの町に住みたい、だとか話す真緒に、「本当に一人で行く気なのか？」と、真顔で訊いたのだ。あのときにどうして、もう少し強引に触れなかったのか、と、後悔をする。そうしていればどのような結果になっていたにせよ、迷う苦しさは、感じずに過ごせていたかもしれない、そう思えた。

食事を終えて、母親が、病気で伏せている父親の介護を始めると、亮治はすぐに立ちあがる。自室は二階の階段近くにある部屋で、窓際に立ったなら、離れの明かりを見ることができるので。食事のときから、その考えに密かにふけていた。だから、何気なく食器を下げ、父親に簡単に挨拶をして二階に上がると、すぐに窓際に腰を下ろした。離れの窓からは相変わらず白熱灯の明かりが漏れている。真緒はやはり閉じこもっているらしかった。

二つの空間を遮って、雨は本降りになっている。リビングから漏れる明かりは、庭の草木をけづらせて映す。亮治のいるところから、真緒のいる場所は遠い。それでも、失う過程にあったものが、こうして目の前の建物に収まっているのは、亮治にとって幸いなのだった。

亮治は親にねだって契約したスマートフォンを手にする。離れの明かりを観察し、はたしてメールを送ろうかと迷う。就職するにあたって真緒も母親からスマートフォンを与えられている。それを持って引きこもっているか、あるいは部屋に置きっぱなしになっているか、それは定かではない。本人が帰っていることを思えば、真緒の部屋に入り、探してみる気にはなれなかった。

転落防止につけられた木製の手すりに腕をかけて、亮治は足をしびれさせる。組み替えて、腕に顎を乗せる。湿った夜気が頬に感じられてくる。安定器が放つ音が消え、聴覚が雨音に満たされていく。しばらくそうしていると、何も変わらずに部屋の中にいるはずなのに、もっと可能性に満ちたどこかにいるのだと思えてしまう。

睫毛が水気を帯び始め、飛沫が光り始める。

(放っておくより、心配するのがやさしさだ)

そう決めると、インターネットにアクセスして、キャラクターの描かれたサイトにアクセスする。それは姉弟で連絡を取るときの習慣だ。インターネット上のサービスで、画面の中のキャラクターがチャットのように会話することができる。そのサービスにログインして、亮治は真緒の作ったキャラクターへダイレクトメールを送る。真緒が同じようにログインしていれば、たとえそのサイトの画面を開いていなくても、通知を受け取ることができる。

真緒からはすぐに返信があった。真緒が操る二頭身の、ネコをデフォルメしたキャラクターが、亮治の画面に現れる。挨拶をする要領で、片手を挙げてみせる。亮治が操る、これも二頭身の野球帽をかぶった少年キャラが、片手を挙げて応える。

**食事は？ お腹へってない？

**大丈夫。それよりちよつと調べて欲しい。

**いいよ。なに？

**子猫の一匹が、おしっこをするときに痛がるの。何かの病気かもしれないと思うんだけど、スマホじゃ調べにくくて。

**了解。心配だね。

亮治は部屋にあるデスクトップのパソコンでそれを調べ、わかったことを伝えた。

**：：獣医に見せたほうがいいみたいね。

**そうだね。明日、連れて行こう。

**四匹全部みせたほうがいいかな。

**たぶんね。それより、お金、大丈夫？

**お金？ 大丈夫、亮治ほど無計画につかってないから。

画面のなかで猫のキャラクターが笑うしぐさをする。亮治は急いで操作を思い出し、自分のキャラクターに怒りを表現させる。

* * 真緒が心配なのに。

* * 何もできないくせに。まあうれしいけど。

* * なんて帰ってきたのか、話してよ。

* * 亮治には関係ないんだよ。

亮治は野球少年を一步だけ猫へ歩み寄せ、沈黙させた。その沈黙は、冷たくあしらわれたことに対する抗議に加えて、真緒に先日のことを強く意識させるはずだ。本当に一人で東京へ行くつもりなのか、と、尋ねたこと。そうすることで真緒がどう思うのか、亮治にはわからない。ただ、その楔が真緒の心中で時間を稼ぎはしないか、迷いを生んで、自分が一緒に行けるときまでの猶予を与えてくれはしないか、そう期待している。

動きのない液晶画面から目を離して外を見る。離れの灯りがじつと光っている。あの空間のなかで、真緒は四匹の猫をあやしているのだろうか。雨は覚えがないほど激しくなっている。

屋根の下、部屋の中に身を隠していると、この土地で自分たちのような存在が、明かりをともしていられる時間は長くない、そう思わせられる。この土地は自分が見捨てた土地なのだと考え、その思い付きの罪深い潔さに、おののく。

春に芽吹いた草木がこの季節にはすっかり腐って、発酵した匂いを漂わせている。雨が降るとその匂いはいつそう強く感じられた。そうやって匂いが充満した木造のぼろ家に、自分は寝そべっている。寝そべって、沈黙する、真緒の閉じこもった離れを眺めている。梅雨の大雨が降っている。汗で湿気た肌に黴の菌糸が降りてくる、亮治はTシャツの裾で腕をぬぐう。

真緒と一緒に東京へ出たい、と亮治は改めて思った。アルバイトからの帰宅の際に地蔵菩薩に祈るのも、真緒の新生活が自分とともに

にあるように、と願うためだ。

イメージがちらつくと、すぐにたまらなくなり、真緒に電話をかける。呼び出し音が不安げになるのを聞く。それは三度目の途中で相手から切られた。拒否を感じ、ショックで画面をじっとみる。すると、画面の右下に吹き出しがひらめき、音をたてながらメッセージの受信を知らせた。亮治は思わず顔をほころばせ、再びキャラクターサイトにアクセスして、虚構の世界で真緒を見つける。

＊いま話したくないの。

＊どうして？

＊猫の世話で、手一杯だから。

＊嘘ばかり。どうせ、ミルクでも飲んで、すっかり寝てるんでしょう。

＊ミルクがないのよ。何かくれって、泣き続けているみたい。体力を消耗しないかな？

＊子猫は何も食べてないの？

＊夕方に食べたつきり。

＊じゃ、待ってて。台所から見繕ってくるから。

亮治は役に立てる喜びから、いそいで立ち上がった。汗ばんだ肌に麻の生地が摺れるのを感じつつ階段を下りる。階下で母親は食器を洗っていた。父親は、風呂にでも入っているらしかった。

「ミルク、ないかな？」

と、亮治は母親に訊いた。

「真緒に頼まれたの？」

「そう」

「自分を出てこないで、あんたにとりに来させたのね。ほんとにもう、意地張るんだから……」

そう言いながら母親は冷蔵庫から牛乳を出した。それをコップにいれ、盆にのせて手渡す。

「牛乳もあまりよくないんじゃないの？　ちゃんと子猫用のミルクを買ってきたほうがいいよ」

「まあ、それは明日かな」

亮治は盆を受け取って、離れに向かう。自室から眺めた雨の景色は、地際で接してみると、より激しさを増したようだった。ミルクに雨が入らないようにコップを胸に寄せ、盆を裏返して頭にかざした。そうやって三和土を伝って、閉めきられた入り口に立つ。

「ミルク、もってきたよ」

嵌め窓に口を寄せて告げると、鍵の解かれる音がする。敷居を重たげに摩擦させながら、戸が数センチだけ開く。それからまたもう少し隙間を大きくした。それがコップを通せるだけの幅になると、部屋の中から真緒の手が伸びる。影の暗い、白い腕だった。

「ありがとう」

てのひらが動かされ、ミルクを催促する。亮治はいささか惨めさを感じながら、その手にコップを近づける。それは惨めさのせいなのかもしれなかった。それとも、代償を求めていることなのか、亮治は瞬間的にコップを持ち替えた。隙間から伸びた真緒の右手は、亮治の左手に添えられて、その上から危なっかしくコップを握る。真緒の体温が甲に伝わってくる。

「手を放しなさい」

と、真緒がいった。

「猫、見てみたいんだけど」

亮治はようやく答える。

「……いまはだめ」

「どうして？」

「見せたいという気がしないの」

(見せたいという気がしない)

と、真緒の言葉を繰り返す。

コップを慎重に預けて手を離すと、姉の腕はどこかつらそうに引っ込められる。

戸は、コップの幅に開けられたまま、亮治の前に放ったらかしにされている。開けようと思えば開けられる、それは真緒も知っているはずであるが、亮治には「開けてもいい」と、思われているのか、「当然、開けないでしょ」と、信用されているのかわからない。

「もう、東京へは行かないの？」

「東京？」

「面接サボってさ、紹介した先生は、大変だろう」

「たぶんね」

それだけだった。

亮治は半開きになった戸の前でじっと待った。水溜りで跳ね返った水が、足首を濡らしていく。砂の混じったその水気を、かがんで払う。そうすると、母屋の縁側から母親がこちらを見ていることに気づいた。衝撃を引きずりながら、背を伸ばす。ふてぶてしく見返す。

母親は逆光で表情は見えないが、体をこちらに向けて、ぼんやりと立っている。両肩に丸く肉がついていて、均整な強さがある。成り行きを見守っているのか、たまたま通って、亮治の姿に目をとめたのかわからない。ゆっくりと片手を挙げ、客を見送るかのように手を振ってみせる。どことなく侘しく、不吉に思えた。

（なぜ、そんなことをするのか？）

と、亮治は惘然としたが、母親は答えることもなく、しばらくして部屋の奥に戻っていった。

行為の意味を考えて、視線がだんだんと床へと落ちていった。白いものが視界の端を流れる。部屋の真ん中あたりに横たえられているのが、真緒の素足であると、いまさら気づく。真緒は、体は見えないが、子猫の入れられた何かに向けて、脚を投げ出すように横たわっているのだった。

いまはもう見続けることが苦しかった。この機会は、土砂に呑み込まれる運命の前に、手向けとして捧げられるものに思えた。

(そうであったなら、自分と真緒とは、都市に逃れられるのではないか)

その考えは亮治を新しい地平に導いて、魅了する。充実したものが沸き、今日という日をとてもうまく過ごした気分になる。

ふと、身の回りに蚊が群がっているのに気づいて、慌てて足踏みをした。

「蚊がいるから、部屋に戻るよ」

と、部屋の中に叫んで、急いで戸を閉める。

母屋では母親が自分のノートパソコンを前にして、画面を食い入るように見つめていた。それがちらりと首を振り、亮治を見て「どうだった？」と、訊いてきた。

「中に入れてもらえない。ミルクだけ渡した」

「意地悪ね」

どこことなく真緒と似た輪郭の母親は、液晶の画面を顔に反射させて、カーキ色の顔を浮かべている。「ほら、やっぱり」と言いながら画面を指さして、「『子猫には子猫用の粉ミルクをやってください』って書いてある」と、調べた文面を読み上げる。

「牛乳じゃ、おなか壊すかな」

「『おなかを壊す場合と、そうでない場合がありますが、おなかを壊さなくても、牛乳には子猫にとって必要な栄養素が十分ではないので、適当ではない』、ほらね？」

亮治は母親のなぞらえた文面を読み領いた。

床の間に置かれたテレビがついていて、消音のかかった映像が天気図を報じている。予報士は、明日の北関東は雨のち晴れだと言う。それから付け加えて、最近の豪雨はシベリアの上層大気に異常があるからだ、と学者の見解を付け加えた。

報道番組がいったん途切れてコマースャルになる。最近よく見るようになった女性タレントが、日の照った溪流で足を冷やしている。汗をかいた横顔にズームアップされ、タレントが唇を動かす。消音の設定であるから何を言っているのかはわからない。手元のペ

ツトボトルを握り、唇に当てる。一口そそぎ、だんだんと笑顔になる。岩の上、上着の裾とともにボトルのラベルが大写しになる。清流に磨かれた岩、漂白された生地、結露した透明のボトル。新発売の清涼飲料のコマーシャルだった。このアイドルも東京に住んでいるのに違いなかった。

亮治は母親を見た。父親の介護で疲れているはずだが、まだ生色を残している。目を合わせると生色が残っているか、探っていることを見抜かれそうなので、あくびのふりをする。その母親は生色を残して、真緒の勝手を心配している。糖尿病の合併症でほとんど失明した父親は、自分では何もできず、いまは寝かしつけられて隣の部屋にいる。

（両親は慎み深すぎ、この瞬間に覚めているのは自分だけだ）
と、思った。

（母親と父親は、これからもこの土地に生きるのだ。やがて父親はこの家で死んでしまう。それから、母はどうするか。この家の空気を吸い、この土地の食べ物を食べ、この土地に愛着を持った母は、そのとき東京に住んでいるはずの俺や真緒と、一緒に暮らすことはできるのか。わからない。わからないが、いずれそうなる。そのときにはわかるのか。俺が東京へ行こうとするのは間違っているのだろうか。真緒と二人で、東京の物語の中へ参加したいと願うのは、愚かなことなのか）

「あの猫、どうするつもりなんだろう」

母親は離れに含みのある笑顔を送る。

「四匹いるらしいね」

「そう。ちらっとみたけど、まあかわいらしいものね。拾って帰るのもわからないでもない。でも、タイミングがねえ。一度しかチャンスがない会社の面接の日に、よりにもよって……」

「猫、嫌いじゃなかったの？」

「そりゃあ、死んじゃうとつらいからね。あんなちっさい、新しい命を放っておくのは無理なんでしょう」

亮治の問いに、母親は自分の意見なのか、真緒の心情を代弁したのか、曖昧な返事をする。

「どうするつもりなのかな。この家で飼うのか、里親探しをするのか。どっちにしたって、離れに籠っていてもしょうがないのに。なんかさ、考えがあるのかね？ あの子なりに」

「この家を離れて暮らすのが心細くなって、爆発したんだよ。猫はきっかけ」

「ああ、そうかもしれぬ」

母親は笑った。

礫が敷き詰められた地面。凍える寒さ。なにより、さんざん痛めつけられた体が不安を掻き立てた。足は礫の上を一步引きずられるごとに、肉が裂け、むき出した骨が削られる不快な感覚が伝わってくる。筋肉が軋んでうごくたびに、ひび割れた皮膚は節々から血を流した。飢えと寒さは感覚を鈍らせて、痛みを鈍痛に、寒さを痛みに変えた。黄ばみ化膿して黒ずんだ指先は動かすこともできない。爪はことごとく剥がれ落ち、醜く腫れあがっていた。口中もまた腫れと出血の感覚で満たされている。舌がないので噛み切って見せることはできない。

視界は薄暗く、飛蚊症、異物感がつきまとう。そして見えている世界は茫漠とした不毛の地である。見渡す限り草木の一本も生えていない。時間が過ぎても変わらずに薄暗く、水を連想させはしない、冷え切った青さが漂っている。遠くには岩山らしき影が霞んでいるが、それは山の向こうの何かを隠すのではなく、ただ障害物として据えられているのだ。

何の希望もなかった。その場に倒れてみせると、耐え難い冷気になお一層の苦痛を味わせられる。だから、不快さを引きずり、あえぎ、苦しみ、意味もなく歩き続ける。

いや、目的とは言えないが、ひとつだけ道しるべがあった。「救いでもなんでもないが、歩くのならその方角へ」と、思わされるこ

とがある。前方の険しい地形のどこかから、キーン、キーンと、不規則な、自然でない音がするのだ。その音を発しているものは、同じ方向へ移動しているのかもしれない。また、ただ単に、するどい岩山の間を、風が吹き抜ける音なのかもしれない。しかし、亮治には、その方向へ進んでいくしかない。

このだれにも気づかれることのない苦しみは、いつから始まるのか。亮治にはわからない。ただ、ふとした拍子にそういう予感がしたのだった。

もう一度、離れの明かりを確かめて、布団に入った。その晩の眠りは浅く、明け方近くには夢を見た。